

労働政策研究報告書 No. 87

サマリー 2007

JILPT : The Japan Institute for Labour Policy and Training

中学生、高校生の職業レディネスの発達

— 職業レディネス・テスト標準化調査の分析を通して —

労働政策研究・研修機構

「中学生、高校生の職業レディネスの発達 ―職業レディネス・テスト標準化調査の分析を通して―」 サマリー

執筆担当者（執筆順）

館 暁夫	西南学院大学 人間科学部 教授
室山 晴美	労働政策研究・研修機構 職業相談・就職支援部門 主任研究員
上市 貞満	労働政策研究・研修機構 労働大学校 助教授
岩脇 千裕	労働政策研究・研修機構 職業相談・就職支援部門 研究員
安達 智子	大阪教育大学 教養学科 講師
松本 純平	労働政策研究・研修機構 職業相談・就職支援部門 統括研究員
笹 のぶえ	東京都立稔ヶ丘高等学校 主幹
杉森 共和	東京都立葛飾総合高等学校 教諭
本間 啓二	日本体育大学 体育学部 助教授

上記以外の研究参加者

亀井 美弥子	首都大学東京大学院（臨時研究協力員 2004.6～2004.9）
劉 濱	東京工業大学大学院（臨時研究協力員 2005.2～2005.9）
山形 時雄	社団法人 雇用問題研究会 相談指導部 部長

研究期間

平成 16 年度～平成 18 年度

調査・研究の目的

本報告書は、「職業レディネス・テストの改訂に関する研究」の過程で得られた資料を標準化調査の分析を中心としてまとめたものである。この研究の目的は、1989年に第2版が発行されて以来、改訂が行われていなかった「職業レディネス・テスト」の新しい版を作成することであった。研究の成果として、新しく改訂された第3版は2006年に公表されたが、改訂の過程で収集した全国の中学生、高校生約27,000人分の職業興味に関する標準化調査のデータをまとめ、中学生、高校生の職業発達を検討することが本報告書のねらいである。

1. 本報告書の構成

本報告書は第Ⅰ部、第Ⅱ部、第Ⅲ部という3つの部分で構成されている。第Ⅰ部では、第1章から第4章において、改訂の背景や目的、方法、結果、改訂版として完成した「職業レディネス・テスト第3版」の内容を紹介し、今回の改訂に関する研究全体を概観する。

第Ⅱ部と第Ⅲ部には、2005年に実施した標準化調査で得られたデータを分析した結果をまとめた。

第Ⅱ部は、検査項目そのものをいろいろな観点から分析した結果をまとめた。第5章では中学生を対象として、A検査、B検査、C検査の結果をもとに、職業興味、基礎的志向性、職務遂行の自信度に関する学年や男女差等を検討した。第6章は、高校生に関して、第5章と同じ分析を行ない、中学生、高校生の比較を行った。第7章では、今回の改訂で選択された項目を使い、第2版との回答傾向の違いを検討した。第8章は、A検査、B検査、C検査の下位尺度間の関連や、A検査とC検査の結果のずれを検討した。第9章は、一人の生徒において各検査で最も得点の高かったところと低かったところの差を算出し、それを「分化度」して定義し、「分化度」における学年や男女間で差を比較した。第10章は、検査の結果を深く解釈するために用意されている「特別集計」の部分に関して、標準化データの分析結果からわかることを検討した。

第Ⅲ部は、検査項目への回答に加えて、標準化の際に検査と一緒に回答してもらったアンケート項目（好きな科目、嫌いな科目、進路への準備度など）や、検査項目への回答と生徒の所属する学科との関連をみたものである。第11章では、高校生を対象として、所属する学科により職業興味、基礎的志向性、職務遂行の自信度がどのように違うかを検討した。第12章では、中学生、高校生を対象として、学校の授業の好きな科目、嫌いな科目と職業興味との関連を検討した。第13章では、将来の進路や仕事をどの程度考えているかというアンケート項目への回答が、「分化度」とどのように関連するかを検討した。

最後の付録には、改訂にあたって算出した統計資料や、参考となる基礎資料をまとめて掲載した。

2. 調査方法

図表1 調査対象者の内訳

(1) 調査対象者

標準化調査の際には、全国の中学校 38 校、高等学校 62 校の協力が得られた。中学校、高等学校の学年別、男女別の対象者の内訳は図表1の通りである。なお、中学校は生徒数が 300 人以上の学校と 300 人未満の学校からサンプリ

		計	男	女
中高計		27,092	13,675	13,417
中学校	計	10,966	5,596	5,370
	1年生	3,721	1,905	1,816
	2年生	3,616	1,825	1,791
	3年生	3,629	1,866	1,763
高校	計	17,104	8,409	8,695
	1年生	6,561	3,244	3,317
	2年生	6,584	3,185	3,399
	3年生	3,959	1,980	1,979

ングを行った。高等学校に関しては、普通科進学率 70%未満、普通科進学率 70%以上、農業+水産、工業+情報、商業、家庭+看護+福祉、その他+総合という7つの学科のカテゴリからサンプリングを行った。

(2) 調査票

「職業レディネス・テスト」を構成するA検査（職業興味）、B検査（基礎的志向性）、C検査（職務遂行の自信度）の3つの部分で構成される標準化のための調査票を作成した。項目数はA検査とC検査が72項目、B検査が96項目である。また、最後にアンケート項目として、将来やってみたい職業（自由記述で3つまで）、学校で学習している科目のうち、好きな科目、嫌いな科目（選択および自由記述）、将来の進路がどの程度決まっているか、将来の仕事についてどの程度考えているかを尋ねた。

3. 主な分析結果

(1) 職業興味、基礎的志向性、職務遂行の自信度からみる職業レディネス

「職業レディネス・テスト」では、A検査とC検査はホルランドの職業興味の6領域(RIASEC)を整理の枠組みとしており、各領域に9項目が含まれる。また、B検査は基礎的志向性として対情報関係志向(D志向)、対人関係志向(P志向)、対物関係志向(T志向)の3つの下位尺度をもつ。A検査は記述された職務内容についての興味の度合い、C検査は記述された職務内容をうまくできる自信の度合いを3段階で評価させる。それぞれ興味と自信の程度を2、1、0点として採点し、領域毎に合計点（最大18点）の平均値を算出した。B検査については日常生活の様々な行動についてあてはまるかあてはまらないかを回答させるが、あてはまるという回答を1点として採点した。D志向と、P志向は各24項目、T志向は16項目の合計点を全体で平均した。以上の結果を中学生、高校生の学年別に示したのが図表2である。また、男女別に各尺度の平均値と標準偏差を算出した結果を図表3に示した。

図表2 中学生高校生の学年別各尺度の平均値と標準偏差 (SD)

検査名	尺度	中学生						高校生					
		1年生(n=3,721)		2年生(n=3,616)		3年生(n=3,629)		1年生(n=6,561)		2年生(n=6,584)		3年生(n=3,959)	
		平均値	SD	平均値	SD	平均値	SD	平均値	SD	平均値	SD	平均値	SD
A検査	R	5.29	4.90	5.48	5.03	5.66	5.09	5.48	5.02	5.28	5.00	5.81	5.19
	I	5.15	4.81	4.87	4.79	4.80	4.80	4.17	4.52	4.18	4.59	4.27	4.60
	A	6.94	4.89	6.81	4.85	6.72	4.70	6.53	4.68	6.35	4.65	6.37	4.69
	S	6.28	4.69	6.38	4.52	6.66	4.67	6.51	4.63	6.54	4.65	6.83	4.70
	E	6.27	4.35	6.33	4.31	6.43	4.47	6.05	4.38	5.85	4.32	6.07	4.44
	C	4.66	4.25	4.89	4.36	5.38	4.52	5.26	4.56	4.90	4.44	5.34	4.57
B検査	D	10.12	4.99	10.18	5.03	10.41	4.90	10.15	4.96	10.48	4.97	11.26	4.89
	P	15.19	4.96	14.69	5.08	14.67	5.10	14.45	5.00	14.15	5.10	14.52	5.02
	T	7.92	3.83	7.36	3.89	7.22	3.84	7.07	3.89	7.16	3.85	7.62	3.88
C検査	R	5.16	4.96	5.26	5.11	5.62	5.22	5.43	5.06	5.34	5.01	5.83	5.27
	I	4.54	4.74	4.27	4.67	4.28	4.73	3.74	4.36	3.79	4.37	3.81	4.41
	A	6.09	4.74	5.71	4.54	5.41	4.39	5.20	4.34	4.87	4.18	4.90	4.25
	S	6.29	4.72	6.42	4.61	6.81	4.69	6.66	4.68	6.85	4.65	7.09	4.78
	E	5.35	4.49	5.19	4.37	5.21	4.44	4.80	4.25	4.67	4.18	4.78	4.28
	C	4.83	4.59	5.19	4.80	5.90	4.95	5.84	4.87	5.83	4.82	6.26	5.00

注:A検査およびC検査(RIASEC)は各9項目の合計の平均点、B検査DとPは各24項目、Tは16項目の合計の平均点

図表 3 中学生高校生の男女別各尺度の平均値と標準偏差 (SD)

検査名	尺度	中学校(男女別)				高等学校(男女別)			
		男(n=5,596)		女(n=5,370)		男(n=8,409)		女(n=8,695)	
		平均値	SD	平均値	SD	平均値	SD	平均値	SD
A検査	R	8.13	4.86	2.71	3.40	8.08	4.98	2.96	3.66
	I	6.39	4.95	3.43	4.13	5.37	4.78	3.06	4.04
	A	5.23	4.26	8.48	4.80	5.62	4.41	7.20	4.78
	S	4.60	3.90	8.35	4.56	4.98	4.14	8.16	4.59
	E	6.49	4.49	6.19	4.26	6.21	4.47	5.75	4.27
	C	4.88	4.33	5.07	4.45	4.79	4.33	5.48	4.67
B検査	D	9.98	5.19	10.50	4.72	10.53	5.13	10.54	4.80
	P	13.79	5.27	15.95	4.55	13.42	5.23	15.25	4.69
	T	7.87	3.96	7.13	3.73	7.54	3.96	6.93	3.78
C検査	R	8.04	5.05	2.54	3.33	8.12	5.05	2.95	3.63
	I	5.79	5.00	2.88	3.88	4.95	4.70	2.64	3.70
	A	4.60	4.16	6.93	4.67	4.62	4.12	5.38	4.36
	S	4.93	4.14	8.14	4.65	5.55	4.40	8.07	4.64
	E	5.56	4.61	4.93	4.23	5.15	4.42	4.36	4.00
	C	5.35	4.86	5.26	4.73	5.69	4.88	6.17	4.87

第5章と第6章においては、中学生、高校生それぞれについて、図表1と図表2に示したような平均値の学年差、男女差を比較した。その結果、学年間の違いよりは、男女間の違いが明確に示された結果となった。また、基礎的志向性よりは職業興味や職務遂行の自信度で男女差が明確にみられた点は興味深い。つまり日常生活の行動レベルでは男女の差はそれほど大きくないが、職業活動という観点からみると、男子が好む仕事、女子が好む仕事が中学生のときから既にはっきりと分かれていることがわかった。すなわち、男子はR領域にみられる機械やものを扱う仕事、あるいはI領域のような研究的な活動、E領域のような管理、企画関係の仕事を好み、女子はS領域のような対人サービスを多く含む仕事やA領域のような芸術的領域の仕事を好む。日常生活の基礎的志向性については、D志向についてはそれほど大きな違いはないが、P志向は女子、T志向は男子の得点が高いという結果が得られた。

なお、第8章では、興味(A検査)と自信(C検査)との関係が検討される。興味と自信との関係の検討は「職業レディネス・テスト」の解釈においても重視されるところで、この2つが一致している領域や不一致の領域、一致の程度などは非常に重要なチェックポイントである。従来は、結果の解釈の際に、興味があっても自信が伴わない研究的領域、芸術的領域や自信があっても興味が低くなりがちな慣習的領域という暗黙の見解があったが、今回の調査の結果の分析はこの解釈をまさに裏付ける結果となった。

また、第7章では、高校生に関して、第2版の時点で集められたデータと2005年のデータとを比較し、全般的に興味や自信の低下があり、特に企業的領域や慣習的領域で興味関心や自信度が下がっている傾向が明らかにされている。

(2) 各尺度の分化度と学年、男女別変化

ホルランドの職業興味の理論においては、職業興味で最も得点の高い領域の差と最も得点の低い領域との差を「分化度」と定義し、分化度が高いほど、職業的な意識の発達が進んでいるとされる。そこで、検査毎に分化度を学校別、学年別、男女別に算出して、検討した。図表4はこのうちA検査（職業興味）の結果である。中学生、高校生を通してみると、中学3年生までは分化度は上昇傾向にあるが、高校1年生で中学2年生程度まで値が下がり、その後、また高校3年生にかけて上昇傾向をたどる。これ

により、ホルランドの理論で提唱されている「分化度」という概念が発達的に変化する職業興味と対応していることが実証された。男女別では女子の方が男子よりも分化度が高いことが示された。

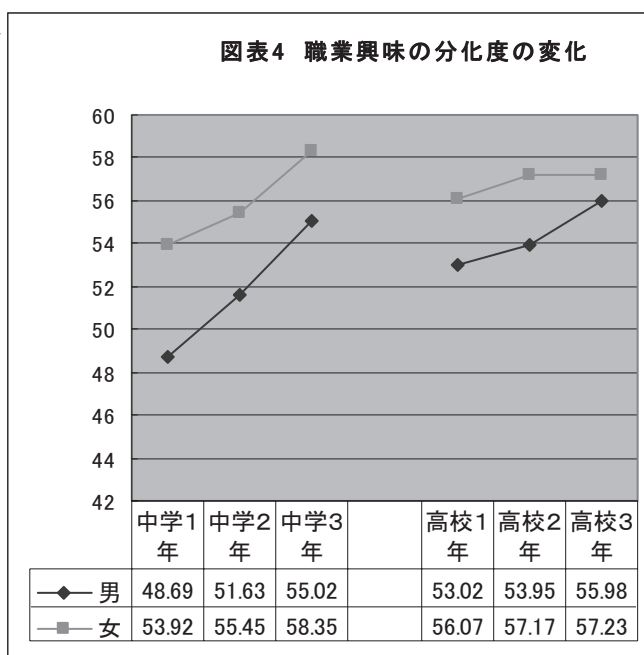
なお、第Ⅲ部の第13章では、アンケート項目として用意された項目である、生徒本人が考える将来の進路や就きたい仕事への意思決定のレベルと実際に検査で測られる「分化度」との関連を検討した。将来の進路や希望する職業を考えている生徒は、そうでない生徒よりも分化度が高いと言う結果は、分化度の概念の妥当性を裏付けるものである。ただ、「よく考えている」と「だいたい考えている」に関しては、必ずしも分化度の高さと正比例しない結果も見られ、本人の認識と実際の職業意識のずれが示唆された結果となった。

(3) 学科や科目の好き嫌いと職業興味との関連

中学校、高等学校の学習過程で学ぶ授業の内容と職業レディネス・テストで測定される生徒の職業興味などはどのように関連するのだろうか。その点について明らかにするために、第Ⅲ部の第11章、12章では高等学校の学科との関連、好きな科目、嫌いな科目と検査の結果との関連を分析した。

第11章は、高等学校の学科との関連で職業興味等の結果をみたものである。高等学校の学科は生徒の職業興味と深い関連があることが確認されている。得られた結果もホルランドの6領域の特徴と学科での学習内容とがよく一致するという関連を示した。

第12章では、中学校、高等学校で学ぶ科目の好き嫌いと職業レディネス・テストの興味等の関連を検討した。職業レディネス・テストで得られた興味のタイプとの関連をみると、タイプの特徴が好きな科目にもよく表れていることがわかった。



4. まとめ

以上、職業レディネス・テストの回答に関する様々な分析を通してみると、「職業レディネス・テスト」に組み込まれている尺度は職業興味、基礎的志向性、職務遂行の自信度という3つを測定するものであるが、その結果は必ずしもその尺度のレベルを反映するだけにとどまっていないということが示唆されている。

職業興味の6領域に関するプロフィールの裏側には、その生徒が好きな科目や嫌いな科目、好きな活動や嫌いな活動との関連を示唆する手がかりが隠れているようである。また、プロフィール全体の高さ、分化度は、他の多くの生徒たちのそれと比べた時の、特定の生徒の意欲や職業意識の高さを知るための資料として読むこともできよう。

さらに、男女差や学年差が中学生のうちから明確に確認されたことは、職業興味や職務遂行の自信度には、中学生の頃から男女差があり、それがだんだんに発達していくことをよく裏付けている。「職業レディネス・テスト」は中学生、高校生という若年の生徒を対象とした検査であり、その職業興味が変化していく過程をとらえるものであるため、固定的に解釈しないように、ということが手引きに述べられているが、本報告書で得られた結果はまさにそれを実証的に捉えているものである。

報告書本体の目次

概要

第Ⅰ部 改訂の概要

第1章 研究の背景・目的

第2章 予備調査の概要

第3章 標準化調査の概要

第4章 「職業レディネス・テスト第3版」の完成

第Ⅱ部 基礎分析編

第5章 中学生の職業レディネス

第6章 高校生の職業レディネス

第7章 第2版と比較した高校生の職業レディネスの変化

第8章 A、B、C検査における各尺度の関連性、および、興味と自信の差異

第9章 職業興味が発達指標としての分化度の検討

第10章 特別集計に関する分析

第Ⅲ部 応用分析編

第11章 高等学校における学科と職業志向性、基礎的志向性の関連の検討

第12章 好きな科目、嫌いな科目と職業興味との関連の検討

第13章 進路決定度、希望職業の有無と分化度との関連の検討

総括 得られた知見と今後の課題

付録

1 調査票、調査項目

(1) 職業レディネス・テスト標準化調査票

(2) 標準化調査回答用紙

(3) 職業レディネス・テスト第3版検査項目

2 基礎統計資料

(1) 標準化規準集団の構成

(2) 各尺度における学校、学年、男女別平均値と標準偏差

(3) 第3版各検査項目に対する中学生の全体、学年別、男女別の回答度数

(4) 第3版各検査項目に対する高校生の全体、学年別、男女別の回答度数

主な参考文献

- Holland,J.L. 1985 *Making Vocational Choices*,2nd.ed. Prentice-Hall. (渡辺三枝子・松本純平・館 暁夫 共訳 1990 「職業選択の理論」 雇用問題研究会)
- 雇用職業総合研究所 1989 新版職業レディネス・テスト関連資料集 職研資料シリーズ II-33
- 松本純平・室山晴美・館 暁夫・安達智子・上市貞満・本間啓二・笹のぶえ・杉森共和・亀井美弥子・山形時雄 2004 「職業レディネス・テスト」の改訂に関する研究Ⅰ—改訂の経緯 日本進路指導学会第26回研究大会論文集,104-105.
- 松本純平・室山晴美 2005 「職業レディネス・テスト」の標準化調査の分析Ⅰ —標準化調査の概要」 日本キャリア教育学会第27回研究大会論文集,71-72.
- 松本純平・室山晴美 2006 職業レディネス・テスト第3版の開発Ⅰ 日本キャリア教育学会第28回研究大会発表論文集, 98-99.
- 室山晴美 2006 職業レディネス・テスト「第3版」の開発 職業研究 p.48-53. 雇用問題研究会
- 室山晴美・松本純平・館 暁夫・安達智子・上市貞満・本間啓二・笹のぶえ・杉森共和・亀井美弥子・山形時雄 2004 「職業レディネス・テスト」の改訂に関する研究Ⅱ—新しいB検査の作成に向けた予備調査の実施と結果— 日本進路指導学会第26回研究大会発表論文集,106-107.
- 室山晴美・松本純平 2005 「「職業レディネス・テスト」の標準化調査の分析Ⅱ —新しいB検査の信頼性と高校生の基礎的志向性の検討—」 日本キャリア教育学会第27回研究大会発表論文集,73-74.
- Muroyama,H. & Matsumoto,J. 2006 *The Change of Vocational Interests among Junior and High School Student.* Japan Labor Review, vol.3, No.2, 74-90.
- 室山晴美・松本純平 2006 職業レディネス・テスト第3版の開発Ⅱ 日本キャリア教育学会第28回研究大会発表論文集, 100-101.
- 労働政策研究・研修機構 2006 「職業レディネス・テスト第3版手引」 雇用問題研究会
- 職業研究所研究紀要7 1974 職業研究所

労働政策研究報告書 No.87 サマリー
中学生、高校生の職業レディネスの発達
— 職業レディネス・テスト標準化調査の分析を通して —

発行年月日 2007年5月10日
編集・発行 独立行政法人 労働政策研究・研修機構
〒177-8502 東京都練馬区上石神井4-8-23
(編集) 研究調整部研究調整課 TEL 03-5991-5104
(販売) 研究調整部成果普及課 TEL 03-5903-6263
FAX 03-5903-6115
印刷・製本 大東印刷工業株式会社

©2007

*労働政策研究報告書全文はホームページで提供しております。
(URL:<http://www.jil.go.jp/>)